

# 上代語指示詞の指示特徴

— 文献を用いた観察データの構築法 —

衣 畑 智 秀\*

## 1 観察と記述

一般的に言語の研究は、ある言語現象の観察およびその一般化（観察的一般化）と、それを記述・説明する仮説の探索から成り立っている。しかし、この観察と記述の区別は、ときに曖昧な形で議論が進められる。特に、「理論言語学」に対して「記述言語学」が措かれるとき、「記述」は抽象的な仮説によることなく事実のみを記しているような印象を与えがちである。しかし、観察された現象を記述しようとする、何らかの抽象的な概念にまとめざるを得ない<sup>1</sup>。

にもかかわらず、記述言語学に上のような印象が付き纏うのには、観察を記述する概念の抽象度が、理論言語学のように高くないことが挙げられよう。その結果、しばしば同じ用語が観察そのものにも観察の記述にも使われるということがある。例えば、本稿が対象とする指示詞の研究では、「直示」や「現場

---

\* 福岡大学人文学部教授

<sup>1</sup> 例えば、理論言語学で言われる観察的妥当性、記述的妥当性、説明的妥当性の区別のうち（Chomsky (1965)、解説としては郡司・坂本 (1999, 2.3 節)）、もっとも抽象度が低い観察的妥当性（観察を過不足なく記述できているか）を達成するにも仮説的な概念である記述が必要になる。記述言語学と理論言語学の違いは、観察の説明に仮説を建てるか否かでなく、その記述する概念に問題はないか（記述的妥当性）や、その概念がどの程度抽象的、包括的であるべきか（説明的妥当性）、といったところの程度によって区別されると考えられる。

指示」という用語が、指示詞の使われる状況にも、抽象的な指示の仕方にも使われることがある<sup>2</sup>。

話者の直感をそのまま観察している（ように感じられる）場合には、観察と、仮説を用いた記述にはほとんど差異がないように感じられる。話者の直感が観察対象であり、記述の道具ともなるためである。しかし、この方法は、話者の直感を直接観察することができない、（自身の直感を記述するのではない）方言研究や、発達研究、文献研究にそのまま適用することが難しい。そこで、そのような研究では特に、観察される状況を表す用語と、直接観察できない、記述のための概念は分けることが望ましい。そのような観点から衣畑（2021）では、話者が頭の中で行っていると仮定される「直示」「照応」という指示の方法と、実際に観察できる指示詞を用いる状況である「現場用法」「非現場用法」という用語を、区別して用いた。我々が観察できるのは、指示詞を使っている状況だけであり、実際、例えば、現場にあるものを指しているか、話者がそれを「直示」として指しているか、「照応」として指しているかはわからないのである。

本稿の対象とする上代日本語の指示詞でも話者の頭の中で何が起きているかは直接観察できない。観察できるのは、どのような状況で指示詞を使っているかだけである。よって、上代語の指示形態素の意味的特徴を記述するためには、まず、観察対象となる指示詞の使われる状況を、正確に押さえておくことが前提となる。しかし、上代語の指示詞の研究では、個々の用例についての報告

---

<sup>2</sup> 例えば、金水(1999)では抽象的な指示の性質に「直示」、指示詞の具体的な使われ方に「直示用法」というように、同じ「直示」という用語を用いている。「用法」の有無でこれら2つが区別されてはいるが、後者の意味で「直示」を用いている箇所も見られる（例えば3.1節の冒頭）。堤（2012）でも「現場指示（用法）」「文脈指示（用法）」の定義（p. 11）は抽象的な指示の仕方のように見えるが、その後の章では、これらの用語で指示詞の使われる状況（先行詞があるか、など）を区別している。個々の文脈がどちらの意味で使われるかをおおよそ明らかにしており、これらの論自体に混乱があるわけではないが、すぐ下で述べるように、現代共通語の指示詞の研究では、指示詞の使われる状況と、指示の方法とを区別する意識がやや希薄に思われるところがある。

はあるものの、全体としてどのような指示形態素がどのような状況で使われているかを数量的に観察・調査した研究はない。

上代語の指示詞研究の嚆矢である橋本（1963, 1966）は、例を多く挙げて上代語の指示詞の特徴を説得的に論じた優れた論文であるが、そこでも以下のような個々の例への言及をもとに、指示形態素の指示の特徴を抽出しており、例えば「文脈指示」「空間的指示」と言えるものがどのくらいあるのかは示されていない。

上代のコには、

針袋己礼は賜りぬ （万葉 四一三三）

妹が紐結八河内を古への人また見きと此を誰か知る

（万葉 一一一五）

のような文脈指示は概して少なく、空間的指示への傾斜が強い。(p. 214)

その後発表された李（2002）、岡崎（2021）でも、この点は基本的に変わっていない。岡崎（2021）では、『日本語歴史コーパス』を用いて万葉集全体の指示形態素の用例数を、「時間」「場所」「事物」等の意味カテゴリに分類しているが、「時間」「場所」「事物」等を指すのに使われる指示形態素の指示的特徴については、個々の用例の解釈に言及するだけである。例えば「事物」を表す例について、

「コ」は（20）「誰ですかこの家の戸を揺するの」(引用者注：万葉集 3460 歌) のように眼前の事物を示す空間的指示、「ソ」は（21）「花橘はいつになったら五月の玉に通せるほどの大きさにその実がなるだろうか」(引用者注：万葉集 1478 歌) のように文脈（波部）に依存して対象を示す文脈指示（中略）が見られる。 (p. 58)

と個々の例への言及はあるが、「空間的指示」「文脈指示」の用例数が、指示形態素コ、ソに応じてどのように偏るのかは示されていない。

このように、上代語の指示詞の指示的特徴についての数量的データが示されないのは、全ての例について「空間的指示」なのか「文脈指示」なのかが決して難しいという点があろう。例えば、4133 番歌の「針袋これは賜りぬ」の「これ」を橋本（1966）は「文脈指示」としているが、実際、作者である大伴池主はこの針袋を所有しているため、空間的に存在する対象を指している可能性も排除できないのである。この議論はまた「空間的指示」や「文脈指示」が抽象的な指示の特徴を指すのか、指示詞の用いられている状況を指すのか曖昧であるという問題にも繋がっている。上の引用では、個々の例を観察している以上、指示詞の用いられる状況の観察であるべきだが、例えば岡崎（2021）では前者を「発話現場に存在する対象を…指示」、後者を「概念でしか捉えることのできない対象を指示」（p. 54）とし、抽象的な指示の仕方を指す用語として定義している。しかし、話者がどのような指示の仕方をしているか自体は観察できないため、当然、用例数を示すこともできない。

本稿は、万葉集を資料として、上代日本語の指示詞の指示特徴を記述するための観察データを構築することを目的としている。2 節では本稿の用いるデータについて、表記や地域差の点から分類する。3 節では 2 節の分類を基に、指示特徴についての観察データを提示する。4 節では、2 節に基いて分類したデータが同じ母集団に属すると言えるかを統計的に検討し、同じ母集団とみなせる指示詞の観察データに基づき、5 節で、観察的一般化の確証と指示詞記述の問題点について述べる。最後に 6 節を本稿の結論に充てる。

## 2 データについて

本稿では、上代日本語のもっともまとまった資料と言える、万葉集を対象として調査を行う。万葉集の指示詞のデータは、国立国語研究所（2022）『日本

語歴史コーパス 奈良時代編 I 万葉集』(バージョン 2022.3 <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/nara.html#manyo>) から「品詞」を「代名詞」として得られたデータをダウンロードし、「語彙素」を見て、指示詞と認められるものを抽出したものである。

ただし、以下の語彙素についてはデータの中に含まなかった。

- (1) シ (其、4 例)、ヲチ (遠、語彙素読み「オチ」、3 例)、コチゴチ (此方此方、4 例)、ソコココ (其処此処、1 例)

シはソと同根と見られ、その特徴も大きく変わらないと見られるが、用例数が少ないため今回は除外した。ヲチは全て時間的に将来を意味するものであり、これだけで指示的特徴を把握するのが難しいためである。コチゴチとソコココのように指示詞が重複されるものは、各指示形態素の指示的特徴が明確に把握できないため、また、同様に、コ (是) やカ (彼) という語彙素で登録されていても、コノモ・カノモ、ヲテモ・コノモのように重複される例(合わせて 6 例)も除いた。指示詞と認定した語彙素を「語彙素読み」で表記し、それぞれの用例数とともに表 1 に示す。

表 1 語彙素別の用例数

語彙素	コ系列				ソ系列			カ系列		合計
	コ	ココ	コチ	コレ	ソ	ソコ	ソレ	カ	カレ	
用例数	239	43	1	13	108	28	9	2	3	446
系列計	296				145			5		

この全 446 例のうち、当時の中央語である奈良方言の例と見られるものが 429 例、これとは一旦別に扱うべき東国諸方言（以下「東国語」）の例と見られるものが 17 例あり、これらは以下の考察でも分けて考えることにする。

表記の観点から見ると、まず東国語の例は全て仮名表記である。一方、中央

語の例は、仮名表記が 81 例、訓字表記が 348 例である。これらを、それぞれの指示形態素（系列）に分けて示すと、表 2 のようになる。

表 2 地域・表記別の用例数

	中央語						東国語		
	コ系列		ソ系列		カ系列		コ系	ソ系	カ系
表記	仮名	訓	仮名	訓	仮名	訓	(全て仮名)		
用例数	46	238	34	108	1	2	12	3	2
合計	429						17		

伝統的に上代語の研究では、訓みが確実な仮名表記をもとに用例の性質を検討し、そこでの一般化を訓字表記に敷衍する形で上代語全体の性質を明らかにしていくという手順が取られる。本稿でもこれに従い、以下で、仮名表記のデータと訓字表記のデータを分けて提示し、両者の関係については、4 節で統計的観点から検討を加える。

### 3 観察データの構築

本節は上代語の指示詞の指示特徴を記述するための観察データを提示する。はじめに中央語の仮名表記の例を示しながら分類方法について説明し(3.1 節)、それを訓字表記にも敷衍する(3.2 節)。その後、用例数が少ないため全体的な傾向が示しにくい東国語の状況を報告する(3.3 節)。本節でのデータ構築方法自体は表記に縛られるものではないため、文献資料全般における指示詞研究に応用できる可能性を持つものである。

#### 3.1 仮名表記（中央語）

##### 3.1.1 先行詞の有無

コ、ソ、カという指示形態素の指示的特徴の違いとしてまず考えられるのが、それらが談話の中に導入された要素を照応的に指すか、それとも現場にあ

る対象を直示的に指すかの違いであろう。しかし、このような、話者がどのような（照応的か直示的か）指示を行っているか自体は、文献から直接観察できない。観察可能なのは、その指示対象が言語的に表現されているか否かだけである。そこで、まず全体の用例を先行文脈（当該の歌および問答における相手の歌）で指示対象が明記されているか否かで分類した。前者を**先行詞あり**、後者を**先行詞なし**と呼ぶ。先行詞が先行文脈にある例は37例、先行詞が先行文脈にない例は44例であった。指示形態素ごとのそれぞれの用例数は表3のようになる。

表3 先行詞の有無（仮名表記）

先行詞	コ系列		ソ系列		カ系列		合計
	あり	なし	あり	なし	あり	なし	
用例数	11	35	26	8	0	1	81

表3を見ると、コ系列では先行文脈に先行詞がある例が少なく、対照的にソ系列ではそれが表現される例が多い。このような違いは、コに「空間的指示」が多く、ソに「文脈指示」が多いとする1節で見た先行研究の観察と一致するように見える。しかし、コ系列にも46例中11例（約24%）先行詞が表現される例があり、これを「概して少なく」（橋本1966：前掲）や「僅かに文脈的指示が見られる」（岡崎2021, 62）と言って良いのかどうかは多分に主観的な問題であろう<sup>3</sup>。少なくとも、従来の研究でこのようなデータ自体が提示されていないのは問題であろう。

以下では、先行詞がない例についてさらに分析を進めるため、ここでは先行詞のある例を例示しておく。それぞれ下線部の指示詞の先行詞を波線によって示す。

<sup>3</sup> なお、橋本（1966）では、「数少ない文脈指示のコの中では、ココが目立つ」とするが、先行詞のあるコ系列の例は、コ4例、ココ5例、コレ2例である。「目立つ」と言えるほどか判断が難しい。訓字表記の例を含めると、ココと訓まれる例は少数である（表7の32例中4例）。

- (2) a. 鷹はしも あまたあれども 矢形尾の 我が大黒に 白塗の 鈴取り付け  
て ... 手放れも をちもかやすき これ (許札) をおきて またはあり  
がたし (4011)
- b. 橋の とをの橋 八つ代にも 我は忘れじ こ (許) の橋を (4058)
- c. 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ 青きをば 置きて  
そ嘆く そこ (曾許) し恨めし 秋山そ我は (16)
- d. ほととぎす こよ鳴き渡れ 燈火を 月夜になそへ そ (曾) の影も見  
む (4054)
- e. 橋だにも 渡してあらば そ (曾) の上ゆも い行き渡らし 携はり う  
ながけり居て (4126)
- f. 語り放け 見放くる人目 ともしみと 思ひし繁し そこ (曾己) 故に  
心和ぐやと 秋付けば 萩咲きにほふ 石瀬野に 馬だき行きて (4154)

ただし、一見、先行詞があるように見えても、主語と述語が倒置されている (3a) のような例、また、先行詞が題詞にある (3b) のような例は、「先行詞あり」とはしなかった。

- (3) a. あしひきの 山行きしかば 山人の 朕に得しめし 山づとそ これ  
(4293)
- b. (筑前国怡土郡深江村子負の原に、海に臨める丘の上に、二つの石あり。  
天地の 共に久しく 言ひ継げと こ (許) のくしみ魂 敷かしけらし  
も (814)

(3a) では通常の語順に戻すと「これ、山づとそ」となり先行文脈に先行詞は表現されていないことになる。また、題詞はこの歌を詠んでいる時に言語化さ

れているとは考えにくいためである。

以上のように先行文脈に先行詞があっても、指示詞は現場の対象を指示している可能性はある。しかし、少なくとも、このような例では指示詞が先行詞を指している可能性を排除できないため、指示詞の直示的な機能の考察にそれらの例を用いるのは適切とは言えない。よって、以下では「先行詞あり」の例は含めず、「先行詞なし」の例のみを分類していく。

### 3.1.2 名詞句の意味カテゴリ

先行詞がない指示詞の直示的な性質を探る前提として、指示詞を含む名詞句を、その意味カテゴリによって分類した。先行詞なし 44 例の分類結果は表 4 のようになった。

表 4 名詞句の意味カテゴリ（仮名表記）

カテゴリ	コ系列				ソ系列			カ系列	合計
	場所	人	物	時	場所	人	物	物	
用例数	16	2	14	3	4	2	2	1	44

意味カテゴリの分類は、ココヤソコなど、指示詞の形態からほぼ特定できる場合もあるが、コの場合はそれが修飾する名詞句の文中における意味役割による場合もある。例えば、(4a) の「この我が里」、(4b) の「こ」はそれぞれ、時鳥が鳴く（はずの）〈場所〉、時鳥が飛び立っていく〈経路〉としての場所だが、(4c) の「このやど」は「古いと感じる」〈対象〉であり、上では物に分類している<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> なお、指示詞が先行詞を持つ場合には、指示詞の指す対象と指示詞が修飾する名詞の意味カテゴリが一致しない例が見られる。例えば 1614 番歌「長月のそ（其）の初雁の便りにも」ではソは「長月」という「時間」を指すが、「その初雁」自体は「物」（動植物も含む）を指していると考えられる。しかし、先行詞がない場合はこのような例は稀で、指示詞の指す対象はおおよそそれが修飾する名詞の意味カテゴリと一致する。仮名表記例で唯一問題になりそうなのは、「古ゆ さやけく負ひて 来にしそ（曾）の名そ」（4467）のような人と名前の関係だが、これは「人」として分類した。

- (4) a. 玉に貫く 花橋を ともしみし こ (己) の我が里に 来鳴かずあるらし (3984)
- b. ほととぎす こ (許) よ鳴き渡れ 燈火を 月夜になそへ その影も見む (4054)
- c. 鶉鳴く 古しと人は 思へれど 花橋の にはほふ こ (許) のやど (3920)

指示詞をそれが指す対象の意味カテゴリによって分類することは、そのカテゴリによって指示詞の使い分けが異なる言語があることにもよるが<sup>5</sup>、この観察データの構築に限って言うと、**時**の場合(そして3.2.1節に後述する**時間**も)、他の**場所**、**人**、**物**とは違った形で指示特徴を捉えなければならないという理由がある。というのも、場所、人、物の場合は、遠方にある可視的な対象と、目には見えない(つまり非可視的な)対象を原理的に区別することができるが、時の場合にはこの区別がない。「目に見える時」=「今」だとするなら、「今」以外の時間は目に見えないからである(このことは「場所」でも「この世/あの世」のような対立で同じことが言える。つまり「あの世」(=死者の世界)が可視的な対象とはならない)。そこで以下では、表4の意味カテゴリのうち、「時」と「場所」「人」「物」を分けて扱う。

### 3.1.3 時制

表4の「時」に分類した3例は全てその文の時制を表す「話題時」を指す例である(話題時でない「時間」については3.2節参照)。「時」の下位分類として、その命題の時制が**過去**か**現在**か**未来**かによって分けた。表4で分類した3例について言えば、全て指示詞コが使われ、(5)に挙げるように、現在2例((5a)

<sup>5</sup> 例えば英語は物を指す場合は this, that、場所は here, there のように形態的に異なる。また一般的に物よりも場所(を表す副詞)の方が指示詞が区別されやすいとされる(Dixon 2003)。

(5b))、未来1例（(5c)）であった。

- (5) a. こ (己) のころは 君を思ふと すべもなき 恋のみしつ つ 音のみし  
そ泣く (奈久) (3768)
- b. 我がやどの いささ群竹 吹く風の 音のかそけき (可蘇氣伎) こ (許)  
の夕かも (4291)
- c. こ (己) のころは 恋ひつ つもあらむ (安良牟) 玉くしげ 明けてを  
ちより すべなかるべし (3726)

ここからコによる時間指示は、現在を指しやすい、ということが言えそうである。ただし、ここで重要なのは、上の時制の分類はあくまで述語のテンスによっているということである。例えば (5c) も解釈の上では現在から未来にわたる時間（やや遠い「夜明け後」と対比されている）であり、現在を含むように思われる。しかし、もし、このような解釈がコという指示詞によって得られたものならば、コの指示特徴を探るためのデータとしては循環する。観察データの構築には、あくまでもコ、ソ、カという指示詞以外による情報を整理することが大切である。

### 3.1.4 可視性

以上のように指示詞以外の特徴によって用例を分類しなければならないのは、指示詞が「場所」「人」「物」を指す場合も同様である。本稿ではまずこれらをその対象が話し手にとって**可視**（目に見える）か**不可視**（目に見えない）か<sup>6</sup>で分類したが、実際には、（コ・ソ・カ自身以外で）可視・不可視を判断す

<sup>6</sup> 金水他（2002）にも上代語の指示詞について「可視的」「不可視的」という用語が見られるが、彼らの「不可視的」には照応も含まれているため、ここで言う「可視」「不可視」の区別とは異なる。前者の「可視的」「不可視的」は照応も含む点で橋本（1966）の「感覚可能」「感覚不能」に近い。ここでの「可視」「不可視」は照応を除いた現場用法にお

る文脈の手がかりを与えてくれない例がかなりあった。例えば、次の歌は「見らを思ふ」長歌の後に付された反歌だが、作者の山上憶良がどこにいるかは詠まれていない。よって、「こら(=子供達)」が話し手から見えるのか見えないのか判断できない(例えば「あいつらに邪魔をされた」と想像の中で詠んだように訳しても誤りとは言えない)。

- (6) すべもなく 苦しくあれば 出で走り 去ななと思へど こ (許) らに  
障りぬ (899)

一方、(7) では、題詞に「草香山を越える時に作った」とあるため、話し手(=詠み手)が「直越えのこの道」(=草香山を通る道)にいることがわかる<sup>7</sup>。

- (7) (五年癸酉、草香山を越ゆる時に、神社忌寸老麻呂が作る歌二首)  
直越えの こ (此) の道にてし おし照るや 難波の海と 名付けけら  
しも (977)

よって、(6) は見えるか見えないかについては**不明**とし、(7) のように(指示詞以外の)客観的な根拠があるもののみ「可視」(あるいは「不可視」と分類した。

このように客観的な(つまり指示詞以外の文脈による)根拠に基づいて分類すると、従来、話し手の近くを指すとされてきた指示詞の用例にもその根拠に乏しいものがあることがわかる。次の例は、李(2002:138)、衣畑(2021:207)で話し手の近くにある可視的な対象を指すとされている例である。

---

ける対立で、通言語的に区別される可視的 (visible) / 非可視的 (invisible) (Anderson and Keenan 1985: § 2.2, Dixon 2003: § 6.3) を例証するための観察用語である。

<sup>7</sup> 「直越えの」とは、平城京から難波に向かう最短ルートといった意味。生駒三山の西側に当たる草香山を越えて難波に行くルートは、険しくても竜田道に比べ近道であった。

- (8) あしひきの 山行きしかば 山人の 朕に得しめし 山づとそこれ（許礼）（4293）

しかし、この歌の題詞にも、次の応答歌にも、「これ」の指示対象が可視的である根拠を見つけにくい<sup>8</sup>。対照的に次の（9）では、題詞に明確に歌に芹が添えられていることが明記されており、話し手が歌を詠んだときに芹を目の前にしていることがわかる。

- (9) （芹の裏に副えたり）  
あかねさす 昼は田給びて ぬばたまの 夜の暇に 摘める芹これ（許礼）（4455）

よって、（9）は「可視」だが、（8）は「不明」とせざるをえない。

従来の研究では（6）や（8）のような見えているか見えていないか「不明」の例についての指摘はなく、結果として、「可視」「不可視」と確実に言える例がどのくらいあるかも明らかにされていない。本稿の調査では、仮名表記の例において、「可視」19例、「不可視」10例、「不明」12例が見つかり、その内訳は表5のようになった。

<sup>8</sup>（8）の歌は、元正天皇が山村に御幸したときの歌と記される。つまり、御幸をした証拠として土産を示している歌である。しかし、その土産が何であるかは不明とされ、よって、それがどこにあるかも文脈に明記されていない。もちろん、元正天皇が証拠を手を持って聞き手（＝舎人親王）に見せている、というのが自然な解釈である。が、それが「これ」という指示詞があるためにそう解釈されるのだとしたら、この指示特徴を観察するデータとしては循環してしまう。

表 5 可視性（仮名表記）

カテゴリ	コ系列			ソ系列			カ系列	合計
	可視	不可視	不明	可視	不可視	不明	不可視	
用例数	19	2	11	0	7	1	1	41

### 3.1.5 話し手からの距離

以上のように分類することによって初めて、直示的に使われる指示形態素の距離を推定するデータを得ることができる。可視の例については対象が話し手近辺にあるか、聞き手近辺にあるか、対話者間のどこかにある（が話し手に近い聞き手に近いかは決定できない）か、対話者の間にない非対話者間（ただし聞き手がいない場合は話し手から離れている）かによって分類した。不可視の例については特にソ系列の用法が多様であるため、この分類は行わなかった。

まず、最初に、コ系列指示詞の可視、不可視の例について見ていく。まず、可視の例については、表5の19例中16例が話し手近辺にあると文脈から判断できるものであった。根拠となる文脈としては(7)や(9)のように、題詞に記されるもののほかには、直示的な動詞の「来」や人称詞の「我」から、話し手の近くに指示対象があると判断できる例が多かった。

- (10) a. ほととぎす ここ（許々）に近くを 来鳴きてよ 過ぎなむ後に 験あらめやも (4438)
- b. 玉に貫く 花橘を ともしみし こ（己）の我が里に 来鳴かずあるらし (3984)
- c. 我が旅は 久しくあらし こ（許）の我が着る 妹が衣の 垢付く見れば (3667)
- d. ほととぎす こ（許）よ鳴き渡れ 燈火を 月夜になそへ その影も見

## む (4054)

最後の (10d) は「こよ鳴き渡る」というパタンを持つものであり、このパタンでは時鳥の姿を見ずに声によって飛んでいくのを判断するので、声を聞くのは話し手でしかありえず、コは話し手の場所を指すと判断される例である。このように聴覚や視覚などから話し手の位置が判断できる例もそれを分類の基準にした<sup>9</sup>。

わずか 19 例中の 16 例だが、このような分布を見ると、コが話し手の近くにある対象を指していることが客観的に示せると言える。一方、残りの 3 例は、指示対象が必ずしも話し手の手元にあるとは言えないものであった。いずれもコの指示特徴には興味深い例なので、以下に示す。

- (11) a. 梅の花 散らくはいつく しかすがに こ (許) の城の山に 雪は降り  
つつ (823)
- b. 天つ水 仰ぎてそ待つ あしひきの 山のたをりに こ (許) の見ゆ  
る 天の白雲 海神の 沖つ宮辺に 立ち渡り との曇りあひて 雨も賜  
はね (4122)
- c. こ (許) の見ゆる 雲ほびこりて との曇り 雨も降らぬか 心足らひ  
に (4123)

まず (11a) は梅花の宴での歌で、宴会を行なっている大伴旅人邸から北に見える大野山を指す例である。明らかに指示対象までの距離はあるが、山を大きく感じれば、近称で指示することもありうる例であろう。(11c) は (11b) への反歌であり、同じ文脈と見なせる。いずれも山の稜線の窪んだところに見ら

<sup>9</sup> 前節の可視性の判断も、話し手からの距離の判断も、結局、話し手の位置が歌の中で（指示詞以外で）明示されているかがそれを判断する重要な要因となる。

れる「雲」を指す例で、遠方にある対象としても不自然ではないが、雨を降らす雲が大きければ近く感じられることもあるのかもしれない。仮名表記以外の例については、3.2 節の (21) および (24a) を参照されたい。

コ系列が「不可視」で使われていると判断したのは次の歌に見られる 2 例である。

- (12) (大島の鳴門を過ぎて再夜を経ぬる後に、追ひて作る歌二首)  
こ (巨) れやこ (己) の 名に負ふ鳴門の 渦潮に 玉藻刈るとふ 海  
人娘子ども (3638)

題詞から鳴門を過ぎて二日経っていることがわかるので、明確に鳴門の渦潮を見ずに詠んだ歌である。ただし、渦潮を思い出し、目の前にありありと感じながら詠んでいると解釈することは必ずしも否定できない<sup>10</sup>。一方で、二日過ぎて思い出しているため「あれがあのだ」と遠称で訳すことも不可能ではない。不可視の例については話し手からの距離を測るのは困難であるため、これ以上分類しない。

次に表 5 のソ系列「不可視」の 7 例について見る。ソ系列の不可視の例には、まず、橋本 (1966 : 220) が「不定指示的用法」と呼ぶ、次のような例がある。

- (13) a. 辛荷の島の 島の間ゆ 我家を見れば 青山の そこ (曾許) とも見え  
ず 白雲も 千重になり来ぬ (942)  
b. 山の峽 そこ (曾許) とも見えず 一昨日も 昨日も今日も 雪の降れ  
れば (3924)

---

<sup>10</sup> 新編全集注には、「これやこの」が「伝聞のみで未見の光景や事象を目のあたりにした感動を示す」「慣用句」としている。時代別国語大辞典上代編「これやこの」にも同様の説明がある。

これらのソコは一見先行する「我家」「山の峽」を指しているようにも見えるが、厳密にはそれらがある場所を指しており「先行詞あり」には分類していない。これらは解釈として疑問（「我家がどこかわからない」「山の峽がどこかわからない」）に対応するため、本稿では「潜伏疑問用法」と呼んでおく。いずれも「見えず」という述語から対象が「不可視」であることが明らかである。

また、既に話し手や聞き手に共有されている概念をさす用法（以下「共有概念指示用法」と呼ぶ）も、ソに特有なものとして見られる。

- (14) 渡る日の かげに競ひて 尋ねてな 清きその（曾能）道 またも会はむため（4469）

ここで「その道」は仏道を指しているが、それをあえて「仏道」と言わず、対話者によって当然了解されているものとして「その道」と呼んでいると考えられる。よってソの指示対象は「可視」ではない。

ソの残りの用法も、この共有概念指示用法に通じるものがある。残りの4例を全て挙げる。いずれも文脈から不可視と判断できる。

- (15) a. 雁がねは 使ひに来むと 騒くらむ 秋風寒み その（曾乃）川の上に（3953）  
 b. 古よ 今の現に 万調 奉る官と 作りたる その（曾能）生業を 雨降らず 日の重なれば 植ゑし田も 蒔きし畠も 朝ごとに 凋み枯れ行く（4122）  
 c. いや継ぎ継ぎに 見る人の 語りつぎてて 聞く人の 鑑にせむを あたらしき 清きその（曾乃）名そ おぼろかに 心思ひて 空言も 祖の名絶つな 大伴の 氏と名に負へる ますらをの伴（4465）  
 d. 剣大刀 いやよ磨ぐべし 古ゆ さやけく負ひて 来にしその（曾乃）

名そ (4467)

(15a) はその前にあるラムが現在推量を表すため、可視でないのがわかる。(15b) は後の田畑が枯れゆくという文脈から「その生業」(＝稲) が収穫できていないのがわかる。(15c) (15d) の「その名」は可視可能な対象ではない。(15c) では「その名」が指す対象があとに「大伴」と述べられており、後方照応 (cataphora) と見なすこともできるが、「<sup>うがら</sup>族を論す歌一首」というこの長歌の題詞から対話者にはすでにそれが「大伴」であることは理解されているのだろう。そういう意味では共有概念指示の一種と見ることもできる。

最後にカ系列の「不可視」1例を見ておく。この例では「かれ」は「み舟」を指すが、倒置されており、よって、言語的先行詞はないものとみなせる。

- (16) (二十五日に、布勢の水海に往くに、道中馬の上にして<sup>おら</sup>口号ぶ二首)  
沖辺より 満ち来る潮の いや増しに 我が思ふ君が み舟かもかれ(加  
礼) (4045)

題詞に道中にて詠んだことが明示されており、話し手は「舟」を見ていないことがわかる。ただし、あたかも舟を見ているかのように詠んでいると考えたほうが自然であり、また、冒頭の「沖へより」から、対象が遠方にあることも示唆される。

### 3.1.6 本節の分類結果

ここまで見てきた分類をまとめると表6のようになる。

表6 仮名表記まとめ

	先行詞	カテゴリ	時制 / 可視性	距離	用例数
	あり				11
コ系列	なし	時	現在	話し手近辺	2
			未来		1
		その他	可視	非対話者間	16
			不可視		3
			不明		2
				11	
<hr/>					
	あり				26
ソ系列	なし	時	可視		0
			不可視		0
		その他	不可視		7
			不明		1
					1
<hr/>					
	あり				0
カ系列	なし	時			0
		その他	不可視		0
				1	

この結果は、先行研究で言われてきたコ系列とソ系列の特徴をよく捉えている。ソ系列は先行詞がある例が多く、かつ、可視の対象を指示する例がない。これは橋本（1966）の「明らかに現場指示と認め得るものがなく、「ほとんどが文脈指示」という記述によく当てはまっていると言える。一方、コ系列についても、話し手の近辺を指す用例が最も多い点は、コ系列を近称とする研究との親和性が高い。しかしコ系列の相当数に先行詞があったり、可視性について不明であったりするものが実態であり、コ系列が近称と言えるのは、それらを適切に処理した上でのことである点に留意する必要がある。

### 3.2 訓字表記（中央語）

この節では、万葉集の訓字表記例について、一字が指示形態素に対応し訓と指示形態素の關係に曖昧性がない「一字・一形態対応」、一字が指示形態素に

対応するが訓と指示形態素の関係に曖昧性がある「一字・二形態対応」、熟字訓など、複数の字が指示形態素を含む句全体に対応する「複数字・句対応」に分けて見ていく。また、前節において分類の基準は示したので、この節ではまずそれぞれの表記法で用いられている例全体の分類を示し、その特徴的な点について述べていく。

### 3.2.1 一字・一形態対応

一字が一つの指示形態素に対応し訓と指示形態素の関係に曖昧性がないものとしては、コ系列に「斯」「是」「此」、ソ系列に「其」がある<sup>11</sup>。これらを合わせた用例数は訓字表記の全用例数 348 例中 277 例になる。それを前節の基準で分類したのが次の表 7 である。

表 7 「斯・是・此・其」まとめ

	先行詞	カテゴリ	時制 / 可視性	距離	用例数
コ系列	あり		現在		20
			未来		5
			過去		1
			話し手近辺		58
	なし	その他	可視	対話者間	4
				不明	4
			不明		64
			あり		72
ソ系列	なし	時	過去	1	
			可視	非対話者間	1
		その他	不可視	13	
			不明	2	

<sup>11</sup> 例えば「此間」を「ここ」と訓む場合、「間」に場所を意味する形態素コが訓があるわけではなく、「此間」全体で熟字訓のように「ここ」と訓まれている可能性があるが、「此」は文字としては指示形態素コを表すと考えられるので、この節の例に入れる。同様のことが、3.2.2 節で取り上げる「彼」を含む「彼所（そこ）」にも言える。

まず全体的な傾向から述べる。仮名表記の分類と比べてみると、コ系列で指示対象が可視性に関して不明な例が64例と多くみられたが、それを除くと、用例の分布は似ていると思われる。仮名表記同様、先行詞のある例はコ系列よりもソ系列の方が多い。先行詞がない場合、コ系列では、「時」を表す場合には現在が多く、「その他」の意味カテゴリーの場合には「可視」で「話し手近辺」に指示対象があると判断できる例が58例と多い。ソ系列ではやはり「不可視」の例が13例と多い。ただし、「時」に係る命題の時制については、その時制が仮名表記されていない場合には時制の解釈自体が妥当なのかには問題が残る。この点については、3.2.3節で詳しく述べる。

次に、仮名表記例には見られなかった用例の分類について述べる。まず、コ系列で先行詞がなく、名詞句が「時」を指す場合にそれが生起する命題が過去時制になる例が1例が見られた。

- (17) 偲はせる 君が心を うるはしみ この（此）夜すがらに 眠も寝ず  
に 今日もしめらに 恋ひつつそ居る（3969）

この例は従属節なので時制がわかりにくいだが、主節の「今日」が昼のことを指しているため、「眠も寝ず」は「過去」のことと考えた。また、「未来」の例は仮名表記の例にも見られたが、ここでは次のような仮定条件に現れる例も「未来」に分類した。

- (18) この（此）夕 栢の小枝の 流れ来ば 梁は打たずて 取らずかもあら  
む（386）

ただ、これらも、命題の時制が現在ではないが、「この夜」や「この夕」が指す「時」は発話時を含む1日に入っていると解釈することに矛盾はない（一方

で、必ずそう解釈しなければいけないというわけでもない)。

仮名表記のソには、「先行詞なし」で、「時」を表す例がなかったが、ここでは「過去」の命題に係る次の1例が見られた。

- (19) 松反り しひにてあれかも さ山田の 翁がその(其)日に 求めあはずけむ (4014)

この「その日」は翁が鷹を逃した日を指しており、話し手の記憶内にあるその日を指していると考えるのが自然な解釈である。このような用法を金水他(2002: 232)に従い「記憶指示用法」と呼んでおく。記憶指示用法はソ系列の「不可視」に特徴的な用法で、次に挙げる(20d)もその例である。

3.1.2節では、名詞句の意味カテゴリを「場所」「人」「物」「時」に分けた。それに対し、訓字表記の例には、「時間」の例も見られた。「時間」の例とは、指示詞を含む名詞句が「時」と同じく時間を表していながら、「時」と違って文の話題時となっていないような例である。例えば(20a)と(20b)はそれぞれ「この日」「この夜」が文の主語になっており、必ずしも命題の時制と一致する保証はない。また、(20c)と(20d)では「この春」「その夜」という時間がそれぞれ「雨」「月夜」を修飾しており、「雨」「月夜」は文の中で原因や対象を表すため、話題時には関係しない。

- (20) a. いづくにか 我が宿りせむ 高島の 勝野の原に この(此)日暮れば (275)  
b. ぬばたまの この(是)夜な明けそ あからひく 朝行く君を 待たば 苦しも (2389)  
c. 山吹の 咲きたる野辺の つぼすみれ この(此)春の雨に 盛りなり けり (1444)

- d. ぬばたまの その (其) 夜の月夜 今日までに 我は忘れず 間なくし  
思へば (702)

このように、指示詞が含まれる名詞句が「時間」を表す場合には、主節の時制ではなく、「場所」「物」「人」と同様に、その「時間」が「可視」か「不可視」かで分類した。(20a) (20c) では話し手がいつの時点いるか、話し手の視点が(指示詞以外の情報で)明らかではないため「不明」とした(例えば(20a) (20c) ともに話し手が情景を想像しながら詠んでおり、「この日」や「この春」の時点にいないかもしれない)。一方(20b)では、朝出て行く恋人を見送るのは苦しいという下の句から、話し手が恋人とともに夜を過ごしている視点から詠んでいるのがわかる。よって、発話時において話し手は夜を否応なく見ており、「可視」に分類する。ただし、3.1.2 節で述べたように、「時間」に関しては距離の区別がなく、可視のものは全て話し手の近辺と考えておく。(20d)は「我は忘れず」から過去のことを詠んでいることがわかり、「不可視」に分類される記憶指示用法の例である。次の表8に、一字・一形態対応表記の意味カテゴリの内訳を示しておく。

表8 意味カテゴリ「斯・是・此・其」

カテゴリ	コ系列					ソ系列					合計
	時	場所	人	物	時間	時	場所	人	物	時間	
用例数	26	57	4	58	11	1	0	2	10	4	173

次に、距離について見る。仮名表記に見られなかった「対話者間」は、確実に話し手の近辺とは言えないが、少なくとも話し手から聞き手の間にそれがあると考えられるものである。(21a) は呼びかけられている聞き手が指示詞で指す場所にいるのが確実な例、(21b) は指示対象である「秋萩」を話し手が持っているのか聞き手が持っているのか不明だが、「見せつつ」とあるようにどち

らかが持っていることは確実な例である。

- (21) a. 籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち この (此) 岡に 菜摘ま  
す兒 家告らせ 名告らさね (1)
- b. 咲けりとも 知らずしあらば 黙もあらむ この (此) 秋萩を 見せつ  
つもとな (2293)

「非対話者間」の対象を指示する例は、仮名表記ではコ系列に見られたが(用例 (11))、一字・一形態対応の例ではソ系列に1例のみ見られた。

- (22) 袖振らば 見つべき限り 我はあれど その (其) 松が枝に 隠らひに  
けり (2485)

(22) では「見つべき限り」から話し手が遠方を見ているのがわかるため、「松が枝」も遠方にあることがわかる。

(22) は「袖振らば」から、夫が去っていく姿を妻が見送っていると考えられる。しかし、(22) の歌自体は夫に詠い掛けたものではないため、「その松が枝」が「対話者間」にあるとは見なさない。一方で次のような例は、題詞や命令形による呼びかけから聞き手を想定することができ、その聞き手の近辺の対象をソ系列が指していると言える。

- (23) a. (大伴宿禰家持が同じ坂上家の大嬢に贈りし歌一首)  
朝に日に 見まく欲りする その (其) 玉を いかにせばかも 手ゆ離  
れざらむ (403)
- b. 明日の日は その (其) 門行かむ 出でて見よ 恋ひたる姿 あまた著  
けむ (2948)

いずれも「不可視」に分類したものだが、今見えていない遠方にいる聞き手自身（= (23a)）もしくは聞き手の近くの対象（= (23b)）を指していると考えられる（前者の類例に 409 番歌、後者の類例に 381 番歌がある）。ここでは「可視」か「不可視」かで、(22) と (23) を分けたが、(22) で去りゆく夫が聞き手のようにリフェレンス・ポイントとなっていれば、これらのソ系列の用法は類似性が認められる可能性もある。

### 3.2.2 一字・二形態対応

一字が指示形態素に対応するが、訓に曖昧性のあるものとしては「彼」が挙げられる。平安末期の漢字字書、類聚名義抄によると、「彼」はカレともソレとも訓まれることがわかる（仏上 39）。橋本（1963）では上代の「彼」を全てソ系列で訓むことを主張しているが、橋本（1982：5 節）ではその立場を修正し、一部カ系列で訓むことも認めている。

ここでは、「彼」の字をどう訓むかは一旦保留し、「彼」の使われ方についてのデータを提示する。ただし、用例を挙げる際は、新編日本古典文学全集の訓に沿う形で示す。

訓字表記 348 例中、「彼」の字が使われるのは 21 例である。その 21 例を 3.1 節の分類に従って示すと以下ようになる。

表 9 「彼」まとめ

先行詞	カテゴリ	時制 / 可視性	距離	用例数
あり				13
	時	過去		2
なし	その他	可視	聞き手近辺	1
			非対話者間	1
		不可視		3
		不明		1

表 9 から「先行詞あり」が多く、「話し手近辺」の例がないなど、「彼」の表

す指示機能について、ソ系列と共通することがわかる。ここでは「その他」に分類された例について見る。

まず、「可視」の例は、一般にはカ系列で訓まれる次の2例である。

- (24) a. 誰そかれ (彼) と 我をな問ひそ 九月の 露に濡れつつ 君待つ我を  
(2240)
- b. 誰そかれ (彼) と 問はば答へむ すべをなみ 君が使ひを 帰しつる  
かも (2545)

(24a) は聞き手 (= 歌の詠み手) への質問であるため、「彼」は聞き手を指すと解釈されるのに対し、(24b) は「君が使ひ」を指すため、対話者 (詠み手と詠み手への質問者である親) 以外を指すと考えられる。ただ、その指示対象が話し手 (= 質問者) からどのくらいの距離にいるかははっきりしない。

「不可視」に分類した中にも、聞き手を指すと解釈される例が2例ある。これらは一般にソ系列で訓まれる。

- (25) a. 我が岡の <sup>おかみ</sup> 竈に言ひて 降らしめし 雪の碎けし そこ (彼所) に散り  
けむ (104)
- b. あらたまの 年の緒長く 相見てし その (彼) 心引き 忘らえめやも  
(4248)

(25a) は大原の里にいる藤原夫人が、飛鳥清御原にいる天武天皇に詠んだ歌で、「彼所」は聞き手である天武天皇のいる場所を指す。(25b) は大伴家持が久米朝臣広綱の館に残した歌で、「彼心」は家持が逢えていない広綱の心を指している。

## 3.2.3 複数字・句対応

最後に複数の字が指示形態素を含む句に対応する例を見る。このタイプの訓読の例は「このころ」と「このよ」しかない。前者に訓まれる熟字には「比来」「比日」「比者」「頃者」「日来」「廻者」があり、後者に訓まれる熟字には「現世」がある。また、複数字ではないが同じく「このよ」と訓まれる「今」も後者に加えて示す。前者が47例、後者が3例、合わせて50例あり、その内訳は表10のようになる。

表10 句対応（訓字）まとめ

先行詞	カテゴリ	時制 / 可視性	距離	用例数
あり				3
なし	時	現在		30
		未来		3
		過去		1
	その他	可視	話し手近辺	5
		不明		8

意味カテゴリは「このころ」が「時」（＝話題時）もしくは「時間」であり、「このよ」が「場所」である。多くが「時」の例として見られる。

「時」の中でも、コ系列で訓まれるように、多くが現在時制を持つ命題に係る。ただし、3.2.1節冒頭でも触れたように、命題の時制が補読される場合には、確実に現在／過去／未来であるとは言い切れない。例えば、波線部の述語形によって(26a)(26b)は「現在」、(26c)は「過去」に分類したが、原文表記を見ればわかるように、現在時制や過去時制が仮名表記されているわけではない。

(26) a. 阿倍の鳥 鶉の住む磯に 寄する波 間なくこのころ（比来）大和し思  
ほゆ（日本師所念）(359)

b. このころ（比者）は 千年や行きも 過ぎぬると（過与）我や然思

ふ 見まく欲りかも (686)

- c. すべもなき 片恋をすと このころ (比日) に 我が死ぬべきは 夢に  
見えきや (夢所見哉) (3111)

よって、例えば (26a) を「しのひし」、(26b) を「すぎにし」のように過去に、(26c) を「みゆる」のように現在に訓むことも不可能ではない。特に、表 10 で「現在」に偏るのが、指示詞「この」による影響の可能性もないとは言えず、その場合は指示詞の指示的特徴を示すデータとしては循環している。よって、訓字表記の歌の「時」の例については、参考として留めるのが良いだろう。

最後に「可視」の例を挙げる。

- (27) a. この (今) 世にし 楽しくあらば 来む世には 虫に鳥にも 我はなり  
なむ (348)
- b. このころ (日来) の 秋風寒し 萩の花 散らす白露 置きにけらしも  
(2175)

(27a) 「このよ」は作者が生きている限り「可視」的でしかありえないだろう。(27b) は、ラシと判断する根拠として、話し手が発話時において「秋風寒し」と感じていることがわかる。よって、「このころの秋風」は今吹いている（目には見えないが感じている）秋風を指すと解釈できる。

### 3.3 東国語について

東国語の例は全て仮名表記である。東国語に見られる指示詞の用例数は、コ系列、ソ系列、カ系列を全て合わせても 17 例と少ない。よって、表 11 に示すように、各分類の用例数はきわめて少なくなる。

表 11 東国語まとめ

	先行詞	カテゴリ	時制 / 可視性	距離	用例数
コ系列	あり				2
	なし	時	現在	話し手近辺 対話者間	1
			未来		1
		その他	可視	1	
			不明	2	
					5
ソ系列	あり				1
	なし	時			0
		その他	不可視		1
			不明		1
カ系列	なし	時		0	
		その他	可視	1	
			不可視	1	

不明の例も多いため、東国語の特徴を反映しているのかは断定できないが、ソ系列が先行詞ありに偏らない点、用例数が少ないにもかかわらずカ系列が2例見られる点は、中央語の特徴とは相違する。その意味で、東国語の例は、中央語から一旦分けて扱うのが望ましい。

これまでの分類では見られなかったものとしては、意味カテゴリに指示詞が命題を指す例が見られたことである。

- (28) 妻と あぜかそ (曾) を言はむ 然らばか 隣の衣を 借りて着なはも  
(3472)

この「そ」は話し手を戒める言葉を指し、共有概念指示用法と考えられる。それを文と考え、文 (= 命題) を指すものと考えておく。指示詞が命題や出来事を指す例は、先行詞がある場合は珍しくないが、先行詞がない場合はこの1例が確認できただけであった。

### 3.4 本節のまとめ

本節では、万葉集に見られる指示詞の用例の分類方法を、中央語の仮名表記を例に提案した後、それを中央語の訓字表記、東国語にも適用し、指示詞の用例を包括的に分析できることを示した。このような指示詞の指示特徴を探るための包括的な用例分類はこれまでの文献をもとにした指示詞研究には見られなかったものである。その際、重要なことは、指示詞の指示特徴が指示詞自体に基づくという循環を避けることである。そのために、本節では、先行詞のありなし、時の係る命題の時制、可視・不可視、話し手の位置に関する情報といった、指示詞以外の文脈情報を手がかりにした。その結果得られたデータについては、4節で統計的分析を行い、5節で先行研究を評価するために活用する。

## 4 表記・地域の差と指示特徴

この節では、これまで表記別、地域別に見てきた指示詞の指示特徴が、同じ母集団からの標本、つまりは、同じ母方言話者の使用法と見なすことができるかどうかを、フィッシャーの正確確率検定（以下「正確検定」）と相関分析を用いて考える。ここで $\chi^2$ 検定ではなく正確検定を用いるのは、本節のデータのほとんどには、観測度数が0の場合が含まれるからである。正確検定によって同じ母集団からのサンプルである（帰無仮説）ことが否定されなかった場合に、表記が異なっても似た指示特徴を示しているかを見るため、相関分析を用いる<sup>12</sup>。以下、4.1節では中央語の仮名表記と訓字表記の関係について、4.2節では中央語と東国語の関係について見る。

---

<sup>12</sup> 正確検定と相関検定は独立した検定である。よって、それぞれの有意差あり／なしで、4つの結果がありうる。そのうち以下で見るのは、正確検定で有意差がない場合に相関があるかないかである。正確検定で有意差がある場合の相関のあり／なしについては、それぞれ、異なる母集団から取られたデータだが相関が見られる、異なる母集団から取られ、相関も見られないという解釈になる。

#### 4.1 中央語仮名表記と訓字表記

仮名表記であれ訓字表記であれ、中央語の資料と見なされる以上、それらの指示詞の指示特徴には違いがないことが期待される。ただし、これまで見てきた表6、7、9、10のデータをそのまま分析にかけることはできない。例えば、万葉集には、ある特定の表現には訓字を用いることが一般的であることがあり（「花」「山」などは一字一音の巻でも訓字で書かれやすいなど）、表記そのものによって差が出る場所は除かないと、有意差の原因が指示特徴とは別のところにある可能性が残る。

そこでまず、表6、7について、以下の点を考慮し、指示詞の指示特徴を比べられるようなペアで検定を行うことにする。

- (29) a. 「時」の例が訓字（表6と7、10を比較）に偏っている。意味カテゴリ自体が指示特徴によるものとは言えないので、「時」の例を除外する。
- b. 「不明」については考慮しない。歌の状況が明記されているかの問題であり、指示特徴の違いとは見なせない。
- c. 「可視」「不可視」の下位分類は行わない。用例数が少なくなり、対応する例のない分類が増えてしまう。
- d. カ系列の例は仮名のみに見られるため除外する。

以上から、表6、7の検定にかけるデータを示すと表12のようになる。

表12 表6と7の指示特徴データ

	コ系列			ソ系列		
	先行詞あり	可視	不可視	先行詞あり	可視	不可視
仮名	11	19	2	26	0	7
一字・一形態	32	66	0	72	1	13

この表を見ると、仮名表記、訓字表記ともに、コ系列では「先行詞あり」の例よりも、「先行詞なし」で、指示対象が「可視」の例が多く、逆にソ系列では「先行詞あり」が多く、ない場合は「不可視」の例が多いという、共通した分布になっていることがわかる。

この表を、データのどこかに偏りがいないか調べるために、 $2 \times 6$ のクロス集計データとして、正確検定によって有意差が出るかを調べたところ、有意確率  $p=0.2219$  で5%水準でも有意差は認められなかった。これはこのデータのどこにも顕著な偏りがいないことを意味し、結果として、仮名表記に見られる指示詞の使用と、一字・一形態の訓字表記に見られる指示詞の使用が同じ母集団(=母方言)から採取されたという帰無仮説を棄却できなかったことを意味する。

しかし、正確検定は、この表のどこにも顕著な差がないという帰無仮説を棄却できなかっただけで、それぞれの使用環境における指示詞の使い方が、表記が異なっても同じ特徴を持つことを、積極的に示しているわけではない。そこで、2種類の表記が持つ行ベクトルの間に関連性が積極的に認められるかを調べるために、相関分析を行った。その結果、仮名表記の行と訓字表記の行の間には、 $r=0.981$  という強い相関が認められ、かつ、有意確率  $p=0.0005$  ( $df=4$ ) で、0.1%水準で有意となった。これは前の検定結果と合わせて、仮名表記の指示詞使用も、一字・一形態の訓字表記の指示詞使用も、同じ母方言話者(=上代中央語)によって使われているために共通性が見られ、それが疑似相関として現れている、と解釈される。よって、仮名表記の例も、訓字表記の例も、同じ母集団からのサンプルとして積極的に扱う妥当性を認めることができる。

次に、表9を、表6、7と比較したい。ただし、表9の「彼」の表記はソ系列もしくはカ系列でしか訓まれないので、表6、7のソ系列、カ系列と比較し、また、数少ないカ系列の例は、ソ系列に足して検定する(つまり、表13の「仮名」「一字・一形態」の数値は、表12のソ系列にカ系列を足した数値)。

表 13 表 9 と、表 6・7 の比較

	先行詞あり	可視	不可視
仮名	26	0	8
一字・一形態	72	1	13
一字・二形態「彼」	13	2	3

この表 13 から、 $3 \times 3$  の正確検定を行った結果、有意確率  $p=0.142$  で、この表のどこにも顕著な差がない、という帰無仮説は棄却されなかった。よって、これらが同じ母集団（母方言）に属する可能性はあると言える。

しかし、これらを相関分析にかけることは難しい。第一に、3 行に渡っている点、第二に、たとえ 2 行に対して相関検定を行ったとしても、それぞれの行ベクトルが持つサンプル数が 3（「先行詞あり」「可視」「不可視」）しかなく、これでは相関係数が高くても、相関が有意になることは難しい点が挙げられる<sup>13</sup>。

そこで、「彼」のデータを、一字・一形態の訓字のデータに足し合わせることで、仮名のデータと訓字のデータ（「斯・是・此・其」と「彼」）が同じ母集団からの抽出と見なせるかを検討する。足し合わせたデータは次の表 14 のようになる。この表にも、カ系列で訓まれる例が含まれている。

表 14 表 6 と 7 の指示特徴データ

	コ系列			ソ（カ）系列		
	先行詞あり	可視	不可視	先行詞あり	可視	不可視
仮名	11	19	2	26	0	8
訓字	32	66	0	85	3	16

<sup>13</sup> サンプル数から相関分析で有意になる相関係数は  $r = \frac{t}{\sqrt{n-2+t^2}}$  によって求められる。ここではサンプル数が  $n=3$  で、相関分析の  $t$  値は  $n-2$  の  $t$  分布に従うため、有意水準 5% で  $t=6.314$  が限界値となり、よって有意となるためには、相関係数は 0.988 以上でなければならない。つまり、有意になるためには 2 つの群のデータがほぼ一致していなければならない、自然なデータが有意になるのは現実的に難しい。

表 14 のデータを  $2 \times 6$  で、正確検定にかけると、有意確率  $p=0.2133$  で有意差は見られなかった。つまり、この表のどこにも顕著な差はないという帰無仮説は、棄却されなかった。続いて、サンプル数が 6 となった表 14 のデータを相関分析にかけたところ、相関係数は  $r=0.989$  という強い相関が得られ、かつ有意確率  $p=0.0002$  で 0.1% 水準で有意になった。よって、仮名表記の例と、一字が指示形態素に対応する訓（「斯・是・此・其」と「彼」）の例には、同じ母方言話者による指示詞使用の特徴が反映されていると認められる。

最後に、表 10 について検討する。表 10 は多くの例が「時」となるため、「時」の例がほとんどない仮名表記の例とは比較できない。よって仮名表記の例を訓字表記の例に類推させるという、上代語研究の一般的な方法を統計的に応用することが難しい。しかし、すでに、一字が指示形態素に対応する訓字表記の例が、仮名表記と同じ母集団からの抽出と考えて問題がないことがわかっているので、ここではこの訓字表記の用例数と、複数字・句対応の用例数とで検定を行う。検定にかけるのは、一定数の用例が見られるコ系列の「時」を表す例とする。

表 15 表 7 と表 10 の比較

	現在	未来	過去
一字・一形態	20	5	1
複数字・句対応	30	3	1

これを  $2 \times 3$  の正確検定にかけたところ、有意確率  $p=0.4608$  となり、有意差は見られず、同じ母集団からの抽出である可能性が残った。しかし、サンプルが 3 であるため、相関係数自体は高いものの ( $r=0.990$ )、相関分析で有意な結果は得られなかった。さらに、この時間の例は 3.2.3 節で見たように、時制の分類自体が補読によるなどの問題も残っている。その意味では一旦、複数字・句対応のデータは、上代語指示詞のデータから除いた方が安全であると思われる。

## 4.2 中央語と東国語

東国語は中央語である上代奈良方言からは大きく異なる方言であると考えられている。とはいえ、指示詞の指示特徴までが異なっていた、という確証はない。そこで両者の異なりについて検定を行うことにする。ここでは、中央語のデータは前節の分析で同じ母集団から抽出されたと想定できる仮名表記と訓字表記を合わせたもの（つまり表 14 の合計値）を用いる。以下の表 16 が検定にかけるデータである。

表 16 中央語と東国語の指示特徴データ

	コ系列			ソ（カ）系列		
	先行詞あり	可視	不可視	先行詞あり	可視	不可視
中央語	43	85	2	111	3	24
東国語	2	3	0	1	1	2

正確検定では、有意確率が  $p=0.063$  となり有意水準 5% に極めて近い結果になった。このことは、東国語の指示詞の特徴が、中央語のそれとは異なる可能性を示唆するが、有意水準 5% では、表のどこにも差がないという帰無仮説を棄却するまでには至らなかった。その上で相関分析にかけたところ、相関係数  $r=0.43$  と弱い相関は見られたが、有意確率  $p=0.394$  と高く、有意にならなかった。用例数が少ないため、確定的な結論は保留せざるを得ないが、これも東国語と中央語の差異を示唆している可能性がある。

## 4.3 本節のまとめ

本節では 3 節で表記や地域ごとにまとめた、指示詞の分類をもとに、その中から指示特徴を反映するデータを抽出し、それらが、同じ母集団、つまり同じ母方言話者の発話とみなせるのかを、フィッシャーの正確確率検定と相関分析を用いて検討した。その結果、仮名表記の例と、「斯・是・此・其」による訓字の例（「一字・一形態対応」）、また、それに「彼」（「一字・二形態対応」）を

足し合わせた訓字の例の間では、正確検定で有意差は見られず、かつ相関が有意に高いことが示され、これらが上代中央方言の指示詞の使用として同じく取り扱うことに問題はないという結論に達した。一方で、複数字・句対応の訓字は用法が少なく相関分析で有意とならず、東国語の例は中央語とは異なる指示特徴が示唆されたが、用例数が少ないため、明確な結論は出せなかった。これらの例に関しては、中央語の指示詞の指示特徴を示すデータからは一旦分けて扱うのが妥当だろう。

## 5 観察から記述へ

4節では、上代中央語の指示詞使用を反映するデータとして、仮名表記の例と、一字・一形態、一字・二形態対応の訓字表記の例が、同一に扱えることを示した。そのデータをもとに、この節ではまず、従来の指示詞の記述について検討する。

指示詞の記述では、形態素ごとの指示特徴の違いが問題になるため、まずこれらの例（=表16の「中央語」のデータ）をコ系列とソ系列の行に分けて表17に示す。ただし、カ系列の仮名表記の1例と、一般的にカ系列で訓まれる「彼」の2例を、それぞれ不可視、可視から除いてある。

表 17 コ系列とソ系列の指示特徴（中央語）

	先行詞あり	可視	不可視
コ系列	43	85	2
ソ系列	111	1	23

このデータが、橋本（1966）の以下の観察の一般化を統計的に確証するものであることを確認しよう。

(30) a. 「上代のコには...文脈指示は概して少なく、空間的指示への傾斜が強

い。ソが文脈指示に片寄ることと鮮やかな対象をなす」(p. 214)

- b. 「ソ・ソレともに、明らかに現場指示と認め得るものがない」(p. 219)

まず (30a) ではコ系列とソ系列の指示特徴が対照的に述べられており、前者が「空間的指示」に、後者が「文脈指示」に偏るとされている。これは、観察データの上では、「先行詞あり」の場合ソ系列の方が多く、「可視」の場合はコ系列の方が多いたことを予想させ、実際その通りである。次に、(30b) では「先行詞あり」を「明らかに現場指示」ではないものとして除くと、先行詞がない場合にソ系列が「不可視」に偏ることが予想され、実際その通りである。「可視」の1例は (30b) の観察に反するが、これは後の用例 (32) で触れる。

以上のことを、統計的に示すと、以下ようになる。表 17 には観測値が 0 になるセルがな（く期待値が 5 を下回るセルもな）いため、差の検定に  $\chi^2$  検定を用いる。また、 $\chi^2$  検定の調整済み標準化残差を用いて残差分析を行い、表 17 のそれぞれの列に有意差が見られることを確認する。まず、表 17 を  $\chi^2$  検定にかけると、 $\chi^2 = 129.66$ ,  $df = 2$ ,  $p < 0.001$  で、0.1% 水準で有意差が見られた。また、 $\chi^2$  検定で得られた調整済み標準化残差は表 18 のようになった。

表 18 表 17 の調整済み標準化残差

	先行詞あり	可視	不可視
コ系列	-8.106	11.236	-4.315
ソ系列	8.106	-11.236	4.315

両側検定で、0.1% 水準での  $z$  値が 3.29 であるため、絶対値がそれを超える「先行詞あり」「可視」「不可視」は全て、0.1% 水準で有意 ( $p < 0.001$ ) であることがわかる。これはつまり、それぞれが（コ系列よりも）「ソが文脈指示に片寄ること」、（ソ系列よりも）「コには...空間的指示への傾斜が強い」こと、（コ

系列と比べると)「ソ・ソレともに…明らかに現場指示と認め得るものがない」ことを確率的に確証している(内田 1995:6章)とみなすことができる。

しかし、観察データから言えることは、(30)の橋本(1966)の観察的一般化を支持しているということだけであり、それ以上の踏み込んだ記述についてはデータは何も言えないことにも注意すべきである。橋本(1966)は上の観察から、コ系列が「話手の感覚可能な領域の指示」(p. 218)をし、ソ系列が「話手の、直接的な感覚が及び得る範囲外」について「観念的な指示」(p. 219)をすずとしている。また、李(2002:156)では前者を「知覚対象指示」、後者を「観念対象指示」と呼び、岡崎(2021:62)では「わが身に関わる」か否かの対立とする。しかし、これらに使われる「感覚」「観念」「知覚」「わが身に関わる」といった概念が漠然としており、この記述自体は表17のデータから直接確証されるようなものではない。例えば、通言語的な観点から言えば、表17の結果は、コ系列は可視的な直示(談話場における、言語表現を介さない物理的な対象の指示)を表し、ソ系列は照応(談話に導入された言語表現を介した対象の指示)を表す一方で非可視的な特殊用法(記憶指示用法、共有概念指示用法、潜伏疑問用法)を持つと、橋本(1966)の観察的一般化に近い形で記述すれば十分であると思われる<sup>14</sup>。

しかし、橋本(1966)の一般化、およびそれを踏まえた記述には、問題がないわけではない。もし、コ系列が直示(あるいは空間的指示)を表し、ソ系列が照応(あるいは文脈指示)を表すというように2つの指示詞だけが対立しているとしたら、現代日本語と異なり、コ系列は話し手に近い対象だけでなく、遠い対象も指すことができたはずである。実際、上代においてカ系列は未発達とするのが通説であり(山田 1954、橋本 1966、李 2002、岡崎 2021など)、上で見たように、上代語の指示詞はコとソの対立として記述される。ところが衣

---

<sup>14</sup> (30)は個々の用例の分布についての一般化であるため「観察的一般化」であるのに対し、ここの「記述」は用例の分布から推測される形態素の意味であることに注意。

畑（2021：207）で指摘したように、橋本（1963, 1966, 1982）の挙げる用例には、明確にコ系列で遠方の対象を指す例が見られないのである。

本稿での調査でも、コ系列の可視 85 例のほとんどは「話し手近辺」を指す例で、遠方を指す可能性がある例（つまり可視で、非対話者間）としては、(11) に挙げた 3 例のみであった。うち 2 例を (31) に再掲する。

- (31) a. 梅の花 散らくは**いづく** しかすがに こ（許）の城の山に 雪は降り  
つつ (823)
- b. こ（許）の見ゆる 雲ほ**びこりて** との曇り 雨も降らぬか 心足らひ  
に (4123)

ではこれを含む 3 例（残りの 1 例はほぼ (31b) と同一例）によって、コ系列が可視的な空間を広く指せたことが支持されるのだろうか。しかし、実は、ソ系列にもカ系列にも、可視的な遠方を指すと見られる例は存在する。それぞれ (22)、(24b) として挙げた例を (32)、(33) として再掲する<sup>15</sup>。

- (32) 袖振らば 見**つべき**限り 我はあれど その（其）松が枝に 隠らひに  
けり (2485)
- (33) 誰そ**かれ**（彼）と 問はば答へむ すべをなみ 君が**使ひ**を 帰しつる  
かも (2545)

さらに、ソ系列、カ系列には、不可視として分類したが、遠方を指していると考えられる次のような例もある。それぞれ (23b)、(16) を再掲。

<sup>15</sup> 岡崎（2021）も (32) について、「話者がぎりぎり見える限界」（p. 59）とし、ソ系列で遠方の対象を指せたことを指摘している。ただし、そのような例がどのくらいあるのか、コ系列との対比で示されていない。

- (34) 明日の日は その (其) 門行かむ 出でて見よ 恋ひたる姿 あまた著  
けむ (2948)
- (35) (二十五日に、布勢の水海に往くに、道中馬の上にして口号<sup>おら</sup>ぶ二首)  
沖辺より 満ち来る潮の いや増しに 我が思ふ君が み舟かもかれ(加  
礼) (4045)

(34) はソ系列が聞き手の近辺を指す場合に用いられる例 (23) (25) のうちの 1 例であり、(35) は題詞から不可視に分類したが、解釈としては遠方の舟を見ているかのように詠んだと考えた方が自然な例である。

さらに、これらのコ、ソ、カ系列の例を比べると、まずコ系列は遠方であっても「山」や「雲」(また (12) の「渦潮」も) のように大きな対象と結びつきやすいのではないだろうか。また、遠方でも聞き手と結びつきやすいときにはソ系列が好まれた可能性も指摘できる ((22) (23) (25) を参照)。カ系列には特色がなさそうだが、遠方を指すコ系列と用例数の上でも優劣はつけられないことを考えると、必ずしも、コ系列は可視的な空間を広く指せたということには、検討の余地があるのではないか。そもそも、可視的な遠方を指す例自体が多くないということも考えられ、カ系列が未発達であったという通説も含めて再検討が必要と思われる<sup>16</sup>。

---

<sup>16</sup> カ系列が上代に未発達であったとする考えの系として、上代においてもカ系列が遅れて派生しているとする見方がある。しかし、本稿で示したようにカ系列が比較的東国語には多く見られること、また上代語以前に分岐した可能性が高い琉球諸語、とりわけ南琉球諸語に遠称としてカ系列が広く分布すること (衣畑 2021) を考えると、地理的解釈からは上代におけるカ系列の後発を想定することは難しいのではないか。上代中央語にカ系列が少ないのは歌という文芸の影響 (例えば、日常的にカ系列を使っている、歌語としては遠方を指すヲ (遠) を用いたなど) も考える必要があると思われるが、本稿の考察範囲を越えるため、今後の課題としたい。

## 6 さいごに

本稿では、万葉集を資料として、上代日本語の指示詞の指示特徴を示す客観的な観察データを構築する方法を提案した。万葉集は、仮名表記と訓字表記に分かれ、さらに訓字表記にもいくつかの種類があるため複雑になるが、指示特徴を観察するためのデータの構築方法自体は、広く文献を用いた指示詞研究に応用できるものと思われる。その際重要となるのは、直接観察できる文脈情報を、指示詞以外から抽出するという点である。従来使われてきた「空間的指示」や「文脈指示」は指示詞の使われる状況の観察なのか、指示特徴そのものの性質なのか曖昧で、観察データを構築するために、包括的に用例を分類できないという欠点がある。また指示詞の使用自体を指示特徴の根拠とすると、その指示詞の指示特徴を知るためのデータとしては循環する。

本稿ではそれらの点に注意し、指示詞の使われている状況から用例を分類した後、仮名表記のデータと、訓字表記のデータの多くが、同じ上代日本語（中央語）の指示特徴を示すデータとして一括して扱えることを、統計的検定によって示した。

その中央語の指示特徴を示すものとして得られた観察データは、先行研究で言われてきたコ系列とソ系列についての観察的一般化と矛盾するものではなく、むしろそれを支持するものであった。その意味では、本稿の結論自体には（5節の最後に見た可視的な遠方の対象を指す場合を除いて）先行研究と大きく変わることはないが、それをデータによって統計的に確証した点が新しいと言える。日本語の歴史的研究が、データを収集し、そこからの帰納的推論によって成り立つものだとすれば、帰納的推論の元となるデータ自体が示されなかった先行研究と本稿の差は、研究の発展性において、決して小さいものとは言えないと思われる。

## 参考文献

- Anderson, Stephen R. and Edward Keenan (1985) Deixis. In Shopen, Timothy (ed.) *Language typology and syntactic descriptions, iii: Grammatical categories and the lexicon*, 259–302, Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the theory of syntax*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Dixon, R. M. W. (2003) Demonstratives. *Studies in Language* 27(1): 61–112.
- 内田惣七 (1995) 『科学哲学入門—科学の方法・科学の目的』世界思想社, 京都.
- 岡崎友子 (2021) 「上代の指示代名詞について」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会) 98(12): 50–65.
- 衣畑智秀 (2021) 「琉球諸語と上代日本語からみた祖語の指示体系試論」林由華・衣畑智秀・木部暢子 (編) 『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』, 190–213, 開拓社, 東京.
- 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6(4): 67–91.
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚 (2002) 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究—日本語・韓国語・トルコ語—」生越直樹 (編) 『シリーズ言語科学4 対照言語学』, 217–247, 東京大学出版会, 東京.
- 郡司隆男・坂本勉 (1999) 『言語学の方法』岩波書店, 東京.
- 堤良一 (2012) 『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版, 東京.
- 橋本四郎 (1963) 「万葉の「彼」」『女子大国文』(京都女子大学) 28: 1–13.
- 橋本四郎 (1966) 「古代語の指示体系—上代を中心に—」『国語国文』35(6) (『橋本四郎論文集 国語学編』(角川書店、1986、209–227) に再録).
- 橋本四郎 (1982) 「指示語の史的展開」『講座日本語学2 文法史』明治書院, 東京 (『橋本四郎論文集 国語学編』(角川書店、1986、228–250) に再録).
- 山田孝雄 (1954) 『奈良朝文法史』宝文館.
- 李長波 (2002) 『日本語指示体系の歴史』京都大学学術出版会, 京都.

謝辞 本研究はJSPS 科研費 JP19K00589 の助成を受けたものです。